

An illustration of a woman with dark hair, seen from the back, wearing a long, flowing white dress. She is standing in a room with a large window on the right that shows a bright blue sky. To the left, there is a dark wooden desk with some papers and a chair. The overall style is that of a classic anime or manga illustration.

英雄
おとめ
墮天

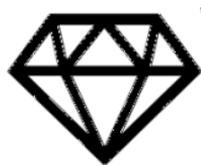
上 R18

カルビ

※注意※

この本は成人向けです。
未成年の閲覧、購入を禁じます。
この小説の著作権は「サークル：焼肉文庫
作者：カルビ」にあります。
無断での複製、転載、インターネット
へのアップロードは禁止です。

英雄
おとめ
墮天



カルビ
焼肉文庫

0	プロローグ	6
1	英雄の敗北	10
2	涙の結婚式	29
3	ふしだらなお妃さま	53
4	愛しい悪夢	89
5	エピローグ／プロローグ	105
番外	if end・孕む英雄	109

ロアス

英雄と謳われる王宮騎士。姫のことを大事に想っている。
幼い頃、王国を攻めにきた魔王軍によって家族を殺されている。

姫様

ロアスの主で、相思相愛。

ゲゼルガ

王国の支配を目論む魔王。
ロアスに並々ならぬ執着心を抱いている。

コンケーロ

魔王の腹心。黒いウロコを持つリザードマン。

0 プロローグ

王都から離れた小高い丘の霊園、両親と妹が眠る墓の前にロアスはいた。

「いよいよ、魔王と戦う時がきた……母さん、父さん、どうか見守っていてくれ」
地面へ剣を突きさし、祈りを捧げる。夜風にブロンズの短髪が靡いた。

ガサガサ。

不意に茂みが動き、ロアスは剣を引き抜き身構える。

「誰だ」

「……勇者様」

「姫様！ いけません、こんな夜更けに姫様一人で墓地になど！」

茂みから恥ずかしそうに出てきたのは、ロアスよりも二歳ほど年下の少女だった。夜に城を飛び出すなど普段なら絶対しない大人しい子なので、騎士は面喰ってしまう。

「だってもう明日には旅立ってしまうのでしょうか？ 二人きりになるには、いましかない
と思ったの」

「姫様……」

頬を染めながら自然と距離を縮めてみつめあう二人。甘い沈黙が暫し騎士と姫を包み、正気に戻ったロアスが慌てて距離を取る。

「姫様、いつも言っています、俺を勇者と言わないでください。俺は平民出身の騎士です」

「王を殺され魔王ゲゼルガに支配されかけた国をロアス様はお救いになりました。さらには人を食らう魔獣や巨人、竜——魔王の僕に奪われた土地を奪還し、既に支配されていた近隣諸国すら解放されました。ロアス様、貴方は立派な勇者、英雄騎士です」

「せめて、魔王を倒してから言ってほしいです」

（俺は英雄だなんて立派なものじゃない、俺の父と母と妹を殺した魔王を憎む復讐者だ）
魔王ゲゼルガがこの国に侵攻してきたのは、二回。

一度目の侵攻でロアスの両親は魔王が放った大規模魔術に撃たれ死んだ。妹は魔王が撤退時に残した呪いから発祥した毒の病で死んでしまう。

十にも満たぬ幼子だったロアスは、魔王に強い憎しみを抱き魔王ゲゼルガを倒すために騎士となった。復讐心からの執念か、隠れた才があったのか、ロアスは若くして一目置か

れるようになる。

二度目の魔王軍による王都侵攻でロアスはゲゼルガと対峙し騎士と魔王の戦いは、あと一歩という所で魔王を逃がす、という結果に終わった。

剣を鞘に戻しながらロアスは力強い声をだす。金色の双眸はどこまで光り輝いていた。

「魔王の在処がわかったいま、俺が必ずこの手で奴を討ち、この国に平和を取り戻します」
「あの、ロアス様、この戦いが終わったらどうか、私と——」

姫の言葉をロアスは指でおさえる。申し訳なそうに、少し照れくさくて困ったように。

「俺も男なので、好いた人には自分から言いたいのです。どうか、その言葉はもう少しだけ待っていてください」

「……はい」

(この戦いが終わった時、俺はきっと愛しい人と共に明るい未来を歩くだらう)

翌朝——

ロアス率いる軍勢が列をなして都を出ていく。目指すは魔王ゲゼルガの住処、魔族が住まう闇の都。

「王都軍万歳！」「英雄騎士ロアス様ばんざーい！」「ロアス様ばんざーい！」「英雄様ばん

ざーい！」

最終決戦を挑む勇姿たちを人々は希望を抱きながら見送る。

民衆の声に英雄騎士は恥ずかしそうにはにかみながら、人々の声援を受けながら大勢の仲間と共に旅立った。

そして英雄騎士は行方知らずとなった。

1 英雄の敗北

「お、っほおおん♥ あ、っひいいい♥ いくつか、いぐう、し、尻でいくうううう♥」
英雄の喘ぎが戦場に響いていた。

魔王に犯されるといふ、屈辱行為であるはずなのに花芯は咽び泣くよう蜜を垂らし、肉壺が剛直を喰い絞めながら愛液を溢れさせる。何より、自分が甘く媚びる声を上げているのが許せなかった。

闇の都へ辿り着く前に王都軍の侵攻を察知した魔王により、両軍は広大な荒地でぶつかり合った。

戦場で再びロアスと対峙した魔王は、戦うのではなく自らの陣営へ騎士を連れ去ったのだ。

ロアスはギロチン板に首と両手を拘束され、自害しないよう媚薬を投与されながら、朝と昼は魔物たち、夜は魔王に七日七晩犯された。

「すっかり我が愛の印をなじませおって」

「やめ。ふあ……くっくううう♥」

魔王の指に紋をなぞられるだけで背筋にゾクゾクと甘い痺れが走った。

桃色の模様が白い肌、臍を中心に描かれていた。術を解かない限り半永久、魅了効果を発揮しつづける淫紋である。

「——ロアス、愛しているぞ」

「やめろ……っ、魅了で喋るな、うああっ！ くうう！」

さらに魅了魔法を含んだ声で語りかけられると心がざわつき、魔王へ恋慕を抱いてしまいたいそうになる。「これは術だ」 〃魔王の囁くまがいのものだ〃と強く言い聞かせるが、魔王を求めて身体が熱く疼き、心が切なく苦しくなってしまう。

「なにが……なにが目的だゲゼルガ……うう！ こんなくだらないことをして……！」

「ロアス、お前には苦汁を飲まされた。手にした領土を奪われ、我が腹心、臣下、兵士たちを一体だけお前に殺されたことか」

「それは、キサマも同じだろ！ 国を奪い、多くの人々を殺し俺の両親と妹を……！」

「だか……お前には心惹かれるモノがある」

「んぶうう?!」

唇を奪われ、たっぷりの唾液と一緒に舌が侵入してくる。唾液に混じり魔力を強制嚥下

させられ、ゲゼルガの魔力を吸収したせいで淫紋がさらに活性化。

「……前から妻を娶るなら我と渡り合えるほど強く美しい者がいいと思っていた」

「……メトル……？ 娶るだど！？」

「我が領土を奪い、我が眷属たちを殺したお前は……憎いながら素晴らしい強さだ。まあ、我には及ばなかったが。美しさも申し分ない、ロアス、お前の純白が似合うその美麗さもいい」

「誰がキサマの妻になどなるか……！」

「なら仕方なし、お前の国の姫に純潔を捧げてもらうか」

「な……！」

ロアスと姫の関係を知っているのだろう、驚く英雄とは反対に魔王は不敵に笑う。

(コイツなら本当に姫を穢すだろう……この、卑怯者め！)

自分が護る愛おしい存在を、魔王に蹂躪されてなるものか。

英雄騎士は覚悟を決める。

「……好きにしろ、ただし寝首を搔かれないように警戒しておくことだな」

「なに、すぐ姫のことなど忘れさせてやる」

冷たい指が腰を強く掴む。

止まっていた抽送がゆっくりと再会され、蜜壺を剛直に掻き混ぜられる。

「そ、そんならこと、あるものかつ、わ、私の、心は姫さま、おおおっ♡」

奥まで突き上げる肉棒に愛おしさが無理矢理込み上げてくる。魔王に対する嫌悪が肛門を犯されるたびに勝手に書き換えられてしまう。尻肉が窄まり牡槍を絞めつけると、呪印犯される歓喜を脳へ捻じ込んでくる。

「はあ、はあ♡ こ、このおっ、術も、使わねば、好いた相手、一人も、落とせぬかおっほおお♡ んぎっ?」

「我だけ感情の板挟みに苦しむのも不公平だろう? お前も一緒に懊悩するがいい」

腰を掴んでいるゲゼルガの指に力が入る。ギチギチと骨すら碎きそうなほどの力強さ。

「ロアス、お前が愛おしいが、憎らしくもある。英雄として人間達に称えられているお前が心底憎いぞ。だからお前の全て、英雄としての矜持も人望も人間性すら全て奪い尽して貶めてやる、徹底的にな!」

「っおおお、おっひいひい、ひっぎいひいおおっ♡」

ズブ、ズブ……パンパンパン! パンパンパン!

肉棒が深い場所まで潜り込み、そのまま激しいストロークへと変わる。苛立ちを含んだ乱暴な腰使いだった。

「お前を徹底的に壊して、救いようのない雌豚として躡やる。ふふふ、剣を握ることも愛する者のことも忘れ、雄がいなければ生きていけぬ下賤で娼婦以下の淑女に仕立ててやる。まずは、そうさな、英雄としてのお前を奪ってやろう！」

「あ、ああっ、熱い！いいい！ひ、ひっいいいっ、あああっ！」

ズブブツウウウ！ ドツブ……ドブブブビュルウウウウウウウウウウ！

肉棒が直腸奥まで貫き、一気に白濁液を噴射した。魔族の放つ精液は人間の男以上に多量で熱く、何度腸内へブチ撒けられても慣れなかった。火傷するほどの灼熱さにロアスは本気で怯え、悲鳴をあげてしまう。

さらにザーメンに含まれた魔力を吸収して、淫呪の魅了がさらに強い力を発揮する。

「げ、ゲゼ、ゲゼル、ガあ、この、このおお、このおおお♥」

理性が捻じ曲げられ、嫌悪が愛情へ強制転換され、脳みそが感情の齟齬に悲鳴をあげる。

目の前の顔が、雄の体臭が、自分を抱く逞しい身体と体温が愛おしくて、愛おしくて、愛おしくて——もう死にたいほど狂おしく愛おしい。

「やべ、お、おれりえの心をおおかえりゆらアあああああ！」

身体をくねらせ意味のない抵抗をするが、ゲゼルガが耳元に口を近づけ、魔力をたっぷり含んだ声で囁く。

「——愛している」

「ああ♡」

たった一言で、頑なだった理性が砂糖菓子のように甘く溶けていく。



魔王ゲゼルガに連れ去られたロアスが、仲間たちと再会したのはさらに一週間経過してからだ。ただし、丸太に括りつけられた見せしめに磔にされた格好で。

魔王を先頭に列をなす魔物の軍勢、その中で巨人に担がれながら、仲間たちの視界に移る距離まで連れて来られる。

「ロアス様だ」「なんてことだ……」「やはり魔王軍に捕まっていたか」

「よく聞け、人間の兵士共！ キサマたちの英雄ロアスは我が軍勢に屈服した」

「……ッ！」

(好き勝手いいやがって……!)

磔にされたロアスは、戦場を俯瞰で眺めることができた。ゲゼルガの言葉に人間側に一瞬で動揺が広がるのが嫌でもわかる。

「我に恐れをなした英雄ロアスは、我の雌妻になることを望んだ！」

(違う、姫様を守るためだ!)

「なんだと」「じ、自分だけ助かるうってか……」「ロアス様に限ってそんなことない！」

しかし反論することは禁じられている。英雄は仲間からの落胆と侮蔑の視線を黙って一心に受け止めた。

「そして、いまから雌になるための去勢処刑を始める！」

言葉と同時に、新しく伸びてきた棒がロアスの股間をグイグイと押しってくる。棒の先端には、半透明色の掌サイズの触手生物が一匹張り付いていた。

(つ、つめたあ……? あ、あああ、熱い、肌が燃えるよう熱い! つ、冷たくて熱い!)

最初肌に触れた時は氷を押しつけられたと思うほどだったが、触手に触れた箇所が段々と肌を炙られているような熱さを覚えてくる。

ヌチヨ、グチヨ……ブヂユ。触手生物は腹にある吸盤を使ってロアスの肌には張りついた。ぶよぶよとした感触が股間を包みこみ、触手の腹の中に陰茎を呑みこんだ。

にゅぶ、ぢゅぢゅっ！ ぶぢゅ、にゅっぶっ。

「ふっぎイ♥」

素っ頓狂な声を上げてしまう。

触手の中には小さな疣が無数に生えており、ギチギチと絞めつけられると、陰茎を包み込む柔肉の圧迫感と心地よい痛みを同時に感じてしまうのだ。縛られている指が縄を掻き
筆る。

にゅぶにゅぶぢゅうううう！ にゅぶ、ぢゅっぶ、にゅぶぢゅうううう！

ペニスを根元まで啜えた触手生物がゆっくりうねり、吸い上げてくる。陰囊も、右が吸盤の生えたものがズヂュウ！ と勢いよく吸われ、左は紐でギチギチに縛られて形が歪み
両方の玉を幾つもの触手が突いてくる。

プス、プス、プス。

さらに左右両方へ針が刺され触身体液を注入された。途端に痛いほど熱くなり、空気に
触れるだけでパンパンに精液で膨れ上がる。

「くくくッ！ ツ！ ツ！ ツ ♡♡♡」

(こ、こんら、こんら感触ううう、のおっほおお、お、おがじぐ、な、るう、う、う！)

あまりの快感に視界が目まぐるしく点滅する。英雄騎士は射精をこらえようと耐えるが、双眸をかつぴろげ、涎塗れの唇を抑える真っ赤な顔は、触手による快感が凄まじいことを物語っている。騎士のやせ我慢の光景がしばし大勢の目に曝される。

「魔物にチンポいじられて感じてる」「なんか、幻滅」「あんな下級の軟体魔物で勃起してるのか……うわぁ」

(そ、そんならぁ！ こ、こんらに我慢してええ！ るっろにいいひっきいい♡ ら、らんで、そんならぁ！ おうんらぁ！ ず、好きでえ、チンポ吸われてるわけじゃらいろいろいい！ んひいいいい♡)

ずりゆ、ずぶぶりゆうう。

触手が一本、尿道管のなかへ忍び込み陰囊まで到達し勢いよく身を引き摺りだした。繊細な尿道壁に毒液を塗されながら、触手のピストン運動がひたすらつづく。

透明な触手にペニスを丸呑みされているので、尿道をレイプされている姿を敵味方問わずに視姦された。

「ほっおおお♥ おうっおおおふっぐふっへえ♥ ふひ、ふっごおおお♥」

アナルを犯された時とは違う感覚で、同じぐらいの衝撃快感がロアスを襲う。頬が緩み涎が滝のよう垂れて、縛られている不自由な腰がガクン！ ガクン！ と跳ねてしまう。

「尿道でもイクのかよ……」 「もうダメだ気持ち悪くてみてらんねええ」 「俺、あんな変態に憧れてたのかよ」

（ち、ちふああああ♥ チンポピストンいやらあ！ いやらあのにいい、感じりゆ、かんじひやうううう！）

ずぼ、ずぼぶっぢゆ、ずぶ、ずっぶ、ずぶっぢゆううう！

荒々しい尿道ファック。触手魔物の体液とロアスの先走り汁が混じりあい、周囲へ飛び散る。

尿道を犯された余韻に慣れることなく溢れる先走り汁。排泄行為に敏感なペニスをさらに過敏に作り替えていき、尿道へ捻じ込まれる触手に悦を見出し軽く果ててしまい、溢れるカウパーがさらにもう一段階絶頂へ導いていき……と完全に負の連鎖が出来上がった。

（もう、む、りい……！ がまんでき、らい、で、でもしない、とオ……去勢される、チンポとられるう）

触手に陰莖を包まれた状態で射精したらどうなるか、それは昨日のうちに魔王から聞かされていた。自分の体の一部がなくなってしまう恐怖が、ギリギリの我慢をさせている。

「やせ我慢はやめたらどうだ？ どれだけ我慢しようがこの刑を取りやめることはないぞ」
「う、うるひゃっほおほおほ♡♡♡」

グルン！ 触手が振じり回転を加えながら尿道管から抜け出した。新しい刺激にロアスの金の目が裏返り、精巧な顔が滑稽なアへ顔になりながら、先走り汗が噴き出す。

「アレをつかうしなさそうだな」

「や、やべえ、み、魅了はやべりよおお！」

「——我のロアス、射精しろ。みっともなくなく」

心を蕩かす甘い声で引き攣った表情がとろりと緩む。臍の淫紋が輝き心臓を切なくしめつけ、植え付けられた愛に支配されてしまう。

「は、はいいいい♡ ゲゼルガ様専用雌豚英雄、しゃせいしまあゝすう♡」

拘束された体で精一杯腰を前へ突き出した。肉棒と触手の肉壁が絡み合い、摩擦力が増せば耐えきれず、ビュブルルル！ と触手の中へ射精してしまう。するとさらに内部が蠢き粘液を得た疣が滑らかに動き、甘美な刺激が百倍千倍へと増加した。

「~~~~っっお、〃お~~~~っっおお〃お♥」

(まとも、に、こ、ええ！ らへらい！)

魅了による命令は一度だが、火がついた肉体はとめられない。

ガクン、ガクン。上手く動かせない体を精一杯動かす姿が猶更、英雄騎士ロアスを色狂いに思わせる。

むぎゆ。ぎゆむうううう。むぢゆうう。ぢゆぎゆむう。

でっぷりと太った陰囊をさらに触手紐が絞めつけ、それでも足りないと手の形をした触手が左右の陰囊を握りしめた。ムギユ、ギユム、ギユツム！ 一定のリズムで揉み解し、不意に勢いよく握りつぶし、感覚を慣れさせない。

(きよ、きよせいいらア、らアけるオお、ぎもぢいいのどまらにやいいいいい♥♥♥)

「いっぐう、いっぐううう ぶひぶっほぶひいいいいいいいいい♥♥♥」

ドビユウウルルル！ ブビユルルルル！

尿道レイプをしていた細触手が抜けて白濁液の吐精量が増した。ペニスを包んでいる触手が、ザーメンを溜め込んで水風船のよう膨らんでいく。

「ぶひっほオおおお♥ いぐうう、いっぐううう♥ チメポあぐめでいっぐううっほふ

っぎいいい ♥♥♥

「あんな変態的なことされて悦んでやがる！」「畜生、何が英雄騎士だ俺たちを騙しやがったな！」「俺達をここまで連れてきたのも、魔王と取引したんだろ！」

(ち、ちがっほおお ♥ ひ、ひめを、姫をまもりゆらめりゃああ ♥♥♥)

「チクショウ！ 死ね！ 変態野郎！」

ブー、ブツヂェルルルル！ ドブヂェルルルルル。

兵士たちの罵倒に心が痛むのに、精搾の強制快楽が悲痛な感情に水を差してくる。蔑みの目がさらにロアスの感覚を敏感にさせていき、奥底から湧き上がる瞬間の白濁熱すら感じとり、快感が跳ね上がっていく。

(こ、こんりゃの、まひゅれえ、罵倒ひやれでいっでりゅ、みらいりゃ、いや、違う！ お、俺は、そ、そんりゃ、変態じゃなっつほおお ♥)

「……野郎、罵倒した途端派手にイキやがった！」「とことん救いようがねえ英雄サマだな！」「こんな奴に期待してた自分が馬鹿じゃねえか！ クソ、クソクソクソクソクソ！」

(くっつ、ビクビクってくりゅう！ ケツ穴あ、罵倒されてビクビクってえ！ 嘘嘘嘘嘘うそうそだああ！ マゾじゃない、お、俺はマゾじゃっほふっぎいっぐいっぐいっぐう

ううううう(♥♥♥)

啜りだされる精液の量は減るところか、むしろ増えていく一方。自由にならない磔姿で体中が疼き、尻穴の奥が雄棒ほしさに咽び泣いて愛液を垂らしてしまう。

「ロアス、最後に別れの言葉を言うがいい。——昨晚たつぷり教えてやっただろう」

「いえりゆ♥ いえりゆからあ、みりようでひやべりゆりゃああ♥♥♥」

耳から入る魔力が脳みそを犯してくる。優しい眼差しで、残酷な声音で語りかける魔王に悪寒と怒りがたつのに、負の感情は全て恋心へ変換されてしまう。

「ド、ドマゾ、雌豚英雄きしいロアスウはあああ！ 魔王ゲゼルガひやまの雌妻奴隷になっへ、殺されないかわりに、いっひよう肉玩具になりまひゆウっほおおういぐ、いっぐウうううう♥♥♥」

言わされる台詞を叫んだだけで妖しい快感がゾクツ、ゾクツ！ と全身を駆け巡った。叫んただけで射精に匹敵する解放感に満足感が去来する。

じゅぽオおじゅぶぢゅうううじよっぼじゅっつぽッ！

ペニスを包む触手がせわしなく絡みつき、吸い上げて陰囊がこれでもかと搾り回される。激痛とそれを凌駕する快樂が精巣から尿道までに到達し、爆発した。

「くくくあああいぐいいぐうううう　♥♥♥　メス豚英雄きよせいしやせいでえいっぐ
ウううううう　♥♥♥」

ドツビ、ドビュブブブツッ！　ドビュブブビュルルルウ！　ブツビュルル
ウルルルウル！！！！

最後の射精、最後の一滴が触手の口に入る感覚を味わいながら、ロアスは果てた。縛られ
れ不自由な四肢の筋肉が極限まで張り詰め、鼻の下伸ばして舌を突き上げたままの表情で
硬直。

硬直したロアスの股間から、パンパンに膨らんだ触手がボトリ、と落ちる。

ジョロ、ジョボボボりり、ジョボボチョコロロ……。

触手から解放された萎えペニスから黄金水の滝のが流れ、尿を垂らすペニスは水分が抜
ける度に縮んでいき最後には、幼児程のサイズに。陰囊は萎んで股から姿を消してしまふ。

絶頂したままの表情で放尿し悲惨な男性器を曝す英雄に、人間の兵士はいっそう白けた。
「これで英雄騎士ロアスは、男ではなくなつた。今後二度と種付けすることも、女を抱く
こともできぬ。代わりにオマエが抱かれて、種を孕むのだ」

(……俺は……姫様を抱くことはできないのか……)

磔から解放されてもどこか上の空で、ぼんやりと地べた尻をつけた。風通しの良くなった股は、なんだかすぐくアンバラスでしっくりこない。

「さて、我がロアス。これで晴れて雌英雄になれたわけだが、今度は我々魔族に忠誠を誓ってもらおうか」

魔王が帯刀していた大剣を鞘から抜き、ロアスの前へ突き刺す。剣は黒い柄と赤い刃でできており、禍々しいオーラーを放っている。明らかに呪われた武器だ。

「この剣でオマエの戦場にいる仲間たち全てを殺すのだ」

「……ちかう？　ころす？」

涙と鼻水塗れの顔でキョトンとしながら剣を受け取る。

まだ絶頂の余韻から降りられない頭と体、魔王の言葉を理解するのに時間がかかった。

「考えてみる、ロアス。お前が晒し者にされた時、奴等はただ指をくわえて眺めていただけだ。今までのお前の功績も忘れて、お前の表面上の言葉しか受け取らず罵倒を叫んだ奴等だ」

「ふえ？」

「そんな奴等が、もし姫がお前と同じ目にあったら——お前の大事な姫を助けると思う

か？」

ぼんやりとした脳髓に魔王の言葉が染み混んでいく。

姫が魔王軍に磔にされ、辱しめられ、それを罵倒しながら眺めるだけの王都軍兵士たち。

「中には辱しめられる姫の姿に欲情する下劣な奴もいるだろうな、隙あらば犯そうとする獣もいるはずだ」

「だめ、それは、姫、姫は大事な……」

「ああ、だからお前が姫を守るのだ」

魔王に肩を抱かれ、侮蔑の視線を向けてくる大勢の人間兵たちと向き合う。

「あいつらを生かしておいても、なんの役にもたたん。姫にとっても魔王軍にとっても、われわれな」

「姫の……ため……」

全ては姫のため、ロアスの柄を握った。



ふと我に返ると辺り一面が死体で埋まっていた。手は赤黒く染まっており、足元で死にかけの兵が血を吐きながら恨み言を垂れている。

「俺は……俺は……」

力が入らず、死体の背中に尻餅ついてしまう。どっと疲労で力が抜けていく。

（俺は一体なにをした？ 俺を信じてついてきてくれた仲間を裏切った挙句、魔王の言葉にそそのかされ、この手で……）

なんとか立ち上がり、肉に刺さったままの剣を引き抜こうとしたが、剣が異様に重い。

「なん、で、この、っううう！」

「我が邪剣は血肉を喰う。そして使用者の剣技と力すら喰う、貪欲な剣だ」

近づいてくる魔王の言葉に耳を疑う。

「俺の剣技を食った……？」

「ああ、オマエの剣技と剣を持つ筋力をな、こやつは食った。英雄騎士ロアスは、二度と剣を振るって戦うことはできない。これで騎士としてのオマエも奪ってやった」

「……っ！ 貴様！」

「しかしこれで、姫の純潔は護られた。実に見事な忠義だったぞくく、はははっ！」
怨敵の前だといのに涙がとまらない。怒りのまま拳で殴りかかろうとしたが甘い魔力が
気怠い身体を包む。

「——我的手をとるがいい」

「……は、い、魔王さま♥」

染みわたる闇の力。思考は霞がかかり、ゲゼルガの大きく紫色の手を握る。かつての仲
間の骸を踏みながら魔王軍へ戻っていった。

3 ふしだらなお妃さま

妃になってロアスの一日の行動は魔王によって決められた。

一日中部屋に籠り魔族の歴史や言語について勉強する日もあれば、妃として公務（ただ魔王の隣の玉座に座っているだけ）を全うする日もある。午前中が公務、午後が勉強の日も逆の日もある。起床から就寝までの行動は魔王と、その部下に監視され一時も気が休まることがない。なにせトイレに行く時間まで決められ、魔王の前で用を足さねばいけないのだ。それもトイレではなく、外で。



「さあ、妃。排泄の時間だぞ」

「こ、こんな毎日……うう、趣味が悪い……」

魔王の後についていき回廊から中庭の隅へ。草木が遮蔽物になり二人が誰かに見られることはない。

中庭の隅へ着く頃には、ロアスの腹からはグルル、グルル……と不吉な音が大きく聞こえだし、体中から脂汗を掻き、足腰に力が入らず魔王にしがみついている。

「苦しいの难道？ ならばほら、だすがいい。ちゃんとドレスは捲るのだぞ、汚れても着替えは許さぬからな」

「っぐうう！ この、ごのおお！」

背中側のドレススカートを引っ張り上げ、尻を外気に晒しながら魔王に後姿を見せる。敵に背後を見せつける不安と緊張で否が応でも研ぎ澄まされる感覚。

「相変わらず、可愛らしい桃色肛門だな」

「この、みるな、みるな！ 変態 〃い 〃い 〃いぎい！」

グル、ギルルウル……グギルルウルルツ！

下腹部からの異音にロアスの眉間に皺が刻まれ、どっと汗を流す。外気に露出した菊皺が何重にも捲れ返り、蕾だった花が大輪を咲かすよう肛門が大きく広がる。

(み、見られてる、魔王に、俺の、尻の奥まで、嫌だこんなの嫌だ！)

尻の奥まで貫く視線を察してしまう。粘っこい視線が、数か月前の結婚披露での痴態を思い出させ体が勝手に発情していく。

魔王に見られている、という事実だけで淫紋が発動し腹痛の原因を、快感を生みだす塊と誤認する。そうなるともう、ロアスには我慢ができない。

「つくおおっおおっ♥ おおっ♥ お♥ む、むりい、もうむりい♥♥♥」
グルルルグルルル！ グヂュルルルル！ ぶる、ぶぢゅう、ぶっびいいいい！
恥知らずに捲れ返った尻穴から、透明でぶにぶにとした長太い物体がヒリだされた。排泄物が大きくヒリでたり、小さく細くヒリでる。肛門皺が伸びきりながら一回も途切れることなく地面へ落ちていく。

ぶっびイ、ぶっべえ、ぶびぶびいいい！ ぶっぢゆるうるるるう！

「なんだか異臭がするな？」

「くくくっおおお♥ こ、このお！ このお、このおおおっ♥ いぐいぐいぐう！ いやらろにイいっぐううう♥♥♥」

中々終わらない謎の物体と混じって、体内に溜まっていたガスも一緒にでてきてしまう。下品な音と異臭に恥ずかしさが込み上げてくる女装英雄。

知っていて知らないふりをする魔王に悪態を吐くが、淫紋が妖しく光り、ここぞとばかりにロアスの心を浸食していく。排泄快感で上ずる声は照れ隠しているようにしか聞こえない。

い。

「こ、こおんらのおお……み、みりゆなあ♥　みりゆなへんひやいいいい♥」

「変態はどちらだ、宿敵に排便姿をみせつけながらアクメする変態英雄」

「ち、ちが、ちがひゅうおっおお♥♥♥」

数分に渡ってつづいた排泄。異物を吐き出し終わった大輪肛門は暫く閉じることなく、粘液でドロドロになっていいる肉壺内部をゲゼルガへ見せつけた。

「我が妃は相変わらぬの大きな糞をヒリだすな」

「ち、ちが、これは、キサマがスライム……を……!」

披露宴でのシャンパンと一緒に浣腸されたスライム。

てっきりシャンパンと一緒にヒリ出たと思っていたが、ロアスの排泄器官に寄生してしまっただけだ。

宿主の肉体に癒着し、魔力や汚物を吸収する寄生型スライム。スライムが満腹になると体が膨らみ特殊な液を分泌し、宿主へ強い排泄行為を誘導させる。

そして排泄させるのは膨れた体を切断した一部分。排泄された部位は、自我を持ち動き回ります。

既にヒリだしたスライムは、自意識を覚醒させその場をうろつきはじめた。

「何を言っているのだ？ 妃がヒリだしたのは人間に仇なす魔物ではなく、何の変哲もない大便だろ？ まさか元英雄が魔物を生み出すのか？」

「あ、ち、ちが……」

人間の脅威である魔物を排泄する行為はロアスには耐えられない事実だった。

「魔物を憎む英雄騎士が腹の中に魔物を飼っているわけあるまい？」

「っおおっご♥」

ズブ、ズブ、ズブ、ヂュウウウ！

肉棒が押し込められる。分裂行為に勤しんでいたばかりの寄生スライムが驚いて腹の奥へ逃げていった。

パンパン！ パンパン！ パンパンッ！

軽快な音を鳴らして隷属妻となったロアスを犯す魔王。リズムカルな抽送にあわせて大きな胸と尻がいく弾んだ。

「そうだろ？ 最弱と言われるスライムと言えど、まさか英雄本人が魔物を増やす行為に勤しむわけないな？」

「ふっぎいおおっ♥ や、やさじくううじでええ お、おながあ、だしたばかりで、緩い
いからあああ♥」

「何をだ？」

「あ、ああっ……糞、糞オお♥」

「ほお、妃は太くて臭い大便を漏らしたのか」

「はっひい♥ 妃ろあひゆ、はあ、ぶっとくて臭い大便を漏らし、まひたあああ♥」

魔王に甘えた声をだして、縫りついているのにロアスは気づかない。

パンパン！ パンパン！ 肉棒がリズムカルに抽送し、快便で既にドロドロの肉壺へさ
らに快感を叩きこむ。

ブヂュ、ブツツシュ！ 肉棒に突かれるたびに、肛門孔の隙間から愛液が噴き出し肉棒
を濡らす。

「ぎ、ぎぼぢいいい、ぶっといウンチ漏らすのぎぼひい♥」

「なら、ザーメンで浣腸してやる！」

グッポオ！ 亀頭の先っぽが結腸にまで入り白濁液を流し込んだ。

ドビュ、ドビュぷりゅるるるピュルツルウルル！

身を焼き尽くす熱さに、金の瞳がぐるっとまわる。

「あゝあゝあ♥ 浣腸ざあめんいぐうううおおっ♥ オおゝお♥ あづいいい、いっばいぐりゆううう、いぐう、いっひやううううう♥♥♥」

「——さあ、お前の愛らしい排泄アクメを我に見せるがいい」
「魅了は、あ、だめえ……！」

相手を惚れこませてしまう魅了魔法混じりの声に、震えて力が抜けてドレスを捲っていた指をはなしてしまう。

ジョロ、ジョボボボボ〜。ジョロロロオロジョボツボ〜！

筋肉が弛緩したのと同時に放尿音とアンモニア臭。純白のドレスに瞬く間に黄色い染みが広がっていく。

「こ、このお、このおお！ はあ、あああっ♥ ふっひいひい♥」

膀胱に溜まっていたものが抜けきる爽快感にブルツと全身を震わし、惚けた表情のまま肛門からも二度目の排泄。ぶっべっぶっぽおおお！ と盛大な音を立てながらドレスに白濁液が飛び散った。

「おやおや、ドレスに立派な染みができたな」

「あ、ああっ！」

お漏らしの印がくっきりついてしまう。白いドレスゆえ、猶更黄ばんだ染みがわかりやすい。真っ赤になり顔を両手で覆うが、顔を覆えないよう手を握られてしまう。

「さて、其方の排泄もおわったことだし、そろそろ次の公務へ戻ろうか」

「……………」

それから謁見場に戻る途中は見回り兵に、謁見場では臣下や官僚たちの視線に耐えながらロアスは一日中黄ばんだ染みのついた純白のドレスを身に纏っていた。

数週間後――

「な、なんで……………今までこんなこと……………うう！」

魔王ゲゼルガにしがみつきながら背後の視線に怯えるロアス。

いつもと同じ庭園の隅に、今日は三体のオーク兵がいた。

「なに、こやつらのことは気に留めるな」

「はい王妃様」「どうぞ我らのことなど気にせず」「思い切り糞便を垂らしてください」

「ふ、ふざげえ、んぎいいい！」

4 愛しい悪夢

玉座での閨を終え、寝室で眠りにつくロアス。

天蓋ベッドの幕を全て絞めきった真っ暗な空間。ベッドに身を沈めたロアスが、繭のようシートをかぶり眠っている。

「ひめさま……」

夢の中で愛しい姫君を想いながら涙を流す。凜々しい英雄騎士でも、貶められ墮落した雌奴隷でもなく、普通の恋する青年の初々しい表情を浮かべていた。

そんな、夢に逃避行しているロアスを邪魔しに、天蓋の幕が音もなく開かれる。

「心を支配してもまだ言うか」

忌々しく舌打ちし忍び寄る魔王ゲゼルガは、シートを剥し、ロアスの寝汗を掻いてしつとりしているドレープの寝巻を剥いだ。そのまま微睡みにあるロアスの蜜壺を犯す。

ジュブジュブジュウウウウ……。

何度も魔王と体を重ねた英雄の肉体は、あっさり肉棒を奥まで啜えこんだ。

「はあ、はあ……ぐっ、ロアス……！ 憎い、憎いぞ英雄……！ 我が野望を計画を邪魔し、我が腹心、同胞を殺したお前が……！ ああ、だが愛おしいぞ、我が妻……我が雌奴隷！ 誰にもやらぬ、お前の髪の毛一つたりとも、早く我が所有物になれ！」

「ふう……はあ……くうう……っお♥」

ヌヂュジュヂュ！ ぶぢゆう！ ブヂュウ！ ぐぢゆううう！

熱に浮かされながら荒々しく腰を振るうストローク。蜜壺は愛液を溢れださせ、ロアスは艶のある寝息をたてるだけで起きる気配はない。

(ひめ、さま……ひめ……)

——ロアスは、姫と草原を歩いている夢を見ていた。平和になった世界で、姫がこっそり城抜け出し自分が慌てておいかけて、そのまま二人で森を歩いている。

「夢の中でも許さぬ、其方は我だけを見て、我だけに心を捧げ！」

「お♥ っうう♥ ふ♥ おおっ♥」

グボ、グボグヂュウウウウ！ ヌヂュウウ、ジュヂュウウウウウ！

腸が揺さぶられるほど、肉壁をなんども小突く。そのたびにロアスは呻き、玉の汗を肌

をまた犯しはじめた。

パンパン！ パンパン！ パンパン！

素早いピストン運動に合わせて、淫紋もチカチカと点滅を繰り返し、次第にクリペニスからの潮吹きのリズムもゲゼルガの抽送に合わせたものになっていく。

「そろそろ夢中でも支配^{愛し}してやろう」

淫紋の模様が蔓を伸ばして身体中へ広がる。ロアスの肉体が桃色の刺青塗れにされ、眠りながらもいっそう激しい喘ぎ声を放ちだす。

「……おっおおふう♥　っほお、ふっうひいい♥　へ、あひ、ひいい♥」

「——ほら、そのまま其方の愛する者の名を呟くがいい」

魔力の含んだ言葉が、ロアスの睡眠意識に浸透していく。

（いとお、しい、ひ、ひめ……ひめさま、いとしい、ひめ、おれの、ひめさま……）

「ひ、ひめ……ひめ、しゃあ……」

瞼が開いて、睫毛が痙攣する。目は開いているが光りは宿っておらず、意識は眠りの世界のまま。シーツを引っ掻き回し、腰がゆっくりと動く。

英雄おとめ墮天 上巻

「発行日」 2018年 10月26日
2019年 10月14日 第二印刷

「著者」 カルビ

「発行」 焼肉文庫

「Pixiv」 12050686

「Twitter」 @ACND64RH63

「Mail」 buekbe2@gmail.com

「印刷所」 コミックモール様
備忘録

「表紙」 ヴィンテージゴールド

「カバー」 マシュマロ

「本文用紙」 書籍用クリーム

「本文フォント」 ころも明朝体

「タイトルフォント」 ころも明朝体・うつくし明朝体

「十八禁文字フォント」 ChopinScript

(ChopinScript)

「行・文字数」 40文字×15行

「ヘッダー」 7mm

「フッター」 2mm

「余白」 上15mm・下15mm・内側15mm
外側15mm・とじしろ3mm

本書は成人向けです。18歳未満の方の目に触れないようお願いいたします。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は禁止です。ネットオークション、フリマアプリでの転売はご遠慮ください。処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、中身が分からない状態にしていただいた上で可燃ゴミとして廃棄してください。